

𒄩 = 40 sila₃, 𒄪 = 30 sila₃, 𒄫 = 20 sila₃, 𒄬 = 10 sila₃ の容量をもつ「王のグル」gur-lugal は従来は二代王シュルギの制定したものと考えられてきたが、ウル・ナム法典の前文の記録から見れば、ウル・ナムの時に制定されたとも考えられる。それはともかくウル第三王朝時代の実証記録の量目の数字は gur-lugal に統一されている。而してその容量はウル王が新しく制定したものでなく、アッカド王朝(2350~2150B.

C.) の gur A-ga-de^{ki} を踏襲したものであると見ねばならない。アッカド王朝時代には「アッカドのグル」の外に地方地方によって都市国家時代(5000~2350B.C.)に使用されていた量目も併用されていた。しかるにウル第三王朝の君主が地方的量目を廢止して gur-lugal に一本化したことはウル第三王朝の集権的統一政策の一つの具体的な表現と解されるであろう。

-1960.11.-

いわゆるラガシュ文書の一、二の問題点について

山 本 茂

筆者はさきに、ラガシュ古王国のウルカギナ時代の社会組織について、少しく検討してみた。^(註)ところが、その際、紙数の都合もあって、社会史的検討を行なった経済文書そのものが、そのような検討の基礎として、果たして信頼しうるものか、どうかについては、ほとんど触れないうちに終わった。そこで、本稿では、この問題について感じたことを、一、二、書きとめておきたいと思う。

(1) 文書の合理性について

まず第一に、細部にわたって分析するには、此の4500年以前のタブレットの記載が、今日の我々から見ても理解できる合理性をもっていることが前提となる。ところが、経済文書のなかには、かなり理解に苦しむタブレットも少くない。筆者がこれまで社会史的検討の手がかり

りとしてきた、ラガシュのバウ神殿の大麥給付表(še-ba)は、シュメール経済文書のなかでは、最も形式も整い、かつ規模も大きく、純粹の会計記録として、理解しやすく、詳細な人名・職名による分析に耐えうるものである。しかし、このše-ba表のなかにも、難解な部分がある。特にラガシュ国の支配者の子供達の支配下にある人々に対する大麥給付表、še-ba lu₂ TUR·TUR-la-ne' は難解である。なかには、一見したところ、合理的な解釈を許さないように見える箇所さえある。しかし、一見非合理的にみえても、仔細に検討してみれば、シュメール人書記のとった、独自の省略的記載法の根拠も理解できなくはない。問題は、我々にとって難解であるに過ぎぬのか、あるいは文書の記載自体に法則性がないのかにある。した

がって、いかに難解であっても、彼等シュメール人書記の省略法に、理屈にあう根拠が認められれば、この文書は詳細な分析に耐えると判断することができる筈である。

次に一例をかかげよう。

(A) DP 117, 118

(大麦の量)	(人名)	(職名)	(所属)
24(sila ₃)	Nin-ama-mu ⁽¹⁾		
12	dumu-nita ⁽²⁾		
24	Nin-da-nu-me-a ⁽³⁾		Sa ₂ -utu-da ⁽⁵⁾ e-da-sig ₇
12	dumu-nita ⁽⁴⁾		
24	Nin-da-nu-me-a ⁽³⁾ 2-kam ⁽⁶⁾ -ma	geme ₂ -har-me ⁽⁷⁾	
24	Lugal-ab-ba-mu ⁽⁸⁾	nu-sig ₂ -nita-an ⁽⁹⁾	Ur ₂ -mud agrig-da ⁽¹⁰⁾ e-da-sig ₇
(B) DP 116			
18	Nin-(ama)-mu ⁽¹⁾		
12	dumu-mi ₂ ⁽²⁾		
18	Nin-da-nu-me-a ⁽³⁾		
12	dumu-nita ⁽⁴⁾	geme ₂ -har-me ⁽⁵⁾	Sa ₂ -utu-da ⁽⁶⁾ e-da-sig ₇
.			
24	Nin-da-nu-me-a	geme ₂ -har-kam	
24	Lugal-ab-ba-mu	nu-sig ₂ -nita	Ur ₂ -mud agrig-da ⁽¹⁰⁾ e-da-sig ₇

下表の〔A〕は、Allotte de la Fuije, Documents présargoniques (以下、DPと略す)、No. 117および118の一部分である。DP 117はウルカギナ王の治世四年の10回目の、DP 118も恐らく同年の

「支配者の子供達に所属する人々に対する se -ba」であるが、いま問題にしようとする箇所については、両者の内容は全く一致している。ところで、この両タブレットでは、ニンアママとニンダヌメアおよび二人の子供が、「サ・ウトゥと共に働いた」Sa₂-utu-da e-da-sig₇となっている。ちなみに、e-da-sig₇は複数形であって、主語が単数であれば、e-

da-tiとなる。ところが、この両タブレットには、ニンダヌメア以下四人の者の職名が記されていない。職名は“2-kam-ma”すなわち「二人目の」あるいは「別の」と注記されたニンダヌメアのあとに来る。ところが、この職名が“geme₂-har-me”（粉ひき女たち）と複数形になっている。記載の順序は、表の各項の右肩に(1)(2)……とつけた番号の

順になっている。はじめの四人が「サウトゥと一緒に働いた」と一括されている以上、我々の常識からすれば、この「粉ひき」というのは、「二人目のニンダヌメア」のみの職名であると考えるのが自然である。従って、複数記号“-me”は誤記ではないかという想像さえ、おこってくる。

他方、最後に“Ur₂-mud agrig-da e-da-sig₇”「監督のウルムードと一緒に働いた」という複数形の一括があるから、「二人目のニンダヌメア」と nu-sig₇-nita (孤児の少年)であるルーガルアップムは、ウルムードの下で働いたことになる。すなわち、これらの記事、サウトゥに率いられる四人のチームと、ウルムード配下の二人のチームに対する大麦給付が記載されているわけである。それでは、「二人目のニンダヌメア」に附された「粉ひきたち」の複数形は、誤記なのであろうか。

[B] の DP 116 との比較が正しい理解の鍵となる。これは、DP 117, 118 と同じく、ウルカギナ王の治世四年の同種の大麦給付表の一部である。こゝでは、ニアマム以下の四名の者の職名が、“g_{me}₂-har-me”であることが明示される。そして数名の記事をばさんで、「粉ひき女のニンダヌメア」が出てくる。このニンダヌメアが、DP 117, 118 における「二人目のニンダヌメア」と同一人であることは、以上三つのタブレットにおいて、それ以下の記述が全く同一であることから、断定して差支えない。

以上のことを認めたらうと、DP 117, 118 と DP 116 とを対照すると、(1) DP 116 ではサウトゥの率いるチームとウルムードのチームとの間に他の記載事項が挿入されたために、二人目のニンダヌメアにも改めて職名が付されたこと、(2) DP 117, 118 では、職種を同じくする二つのグループが接続して記されたために、我々の常識では省略しない g_{me}₂-har-me が、Sa₂-utu-da e-da-sig₇ の前で省略されたこと、が理解できる。DP 117, 118 の g_{me}₂-har-me は、ニアマム以下五人の者の職名を示しているのである。従って複数記号 me は、誤記ではなくて、特に必要な記載といわねばならない。表に書き改めてみると、このシュメール的省略も、案外理にかなっているから面白い。

(2) 手写史料の信憑性について

次に、よりシリアスな問題がある。それは、我々が史料と呼んでいるのは、すべて手写史料であることである。ラガシュのパウ神殿の経済文書史料として著名な DP, TSA, HST, RTC 等々は、いずれも Allotte de la Fuije, H. de Genouillae, M. I. Hussey, F. Thureau-Dangin ら、すぐれた学者たちの手写史料集である。しかしこれらの書物が出版された今世紀初頭には、シュメール学は、それらの文書を十分理解する段階にまで達していなかった。そのために、今日から見れば誤写ではないかと思われる箇所が、ある程度発見されるはずである。たとえば、Chiera, “Sumerian Religious

Texts”については、S. N. Kramer の補正がある(“Corrections and Additions to SRT” in ZA N.F. XVIII, 1957)。

しかし、神殿経済文書については、そのような再検討はほとんどなされていない。けれども(1)に記したと同じ理由によって、すなわち史料の詳細な検討・分析に入る前には、先ず記載そのものが信用できるか否かを問わねばならぬという理由によって、此の手写の信憑性があるため検討されねばならないのは、経済文書

とて、宗教的文書と選ぶところはないであろう。事実、 $\check{S}e$ -ba表を集めて比較検討してみると、シュメール人書記の誤記か、あるいは諸学者たちの誤写かは、我々には決定しがたいけれども、相当の誤まりが見出される。特に不確実なのは数量の記載である。

一例として、TSA 10に収められた、女奴隷(?)と子供たちに対する大麦給付表をとりあげてみよう。此の種の $\check{S}e$ -ba表は、数人ないし数十人のチームに分けて記載されるのであるが、各チームの末尾には、受給量の小計が記録されている。たとえば、

[A]	$\check{S}u$ -nigin ₂	1 geme ₂	18 (sila ₃)	$\check{S}e$ -bi
		21 {geme ₂ }	{ }	4 gur-sag-gal 6 (sila ₃)
		1 nu-sig ₂ -nita	18	Ma-al-ga
		1 nu-sig-mi ₂	18	
		2 $\check{S}a$ ₃ -dug ₃ -nita	12	
		9 $\check{S}a$ ₃ -dug ₃ -mi ₂	12	
(訳) 計	女奴隷	1人	18(シラ)	
	{女奴隷}	21人	?(シラ)	大麦(計)
	孤児の少年	1人	18(シラ)	4 グル・サグ・ガル 6 シラ
	孤児の少女	1人	18(シラ)	(代表受取人)
	少年	2人	12(シラ)	マ・アル・ガ
	少女	9人	12(シラ)	
[B]	$\check{S}u$ -nigin ₂	20+3 geme ₂	24 (sila ₃)	{ $\check{S}e$ -bi} 3
		2 $\check{S}a$ ₃ -dug ₃ -mi ₂	12 (sila ₃)	{ ^d . Nan $\check{S}e$ }-da-nu-mu-e-a
(訳) 計	女奴隷	23人	24(シラ)	{大麦 計} 3
	少女	2人	12(シラ)	(代表受取人)

ナンシェ・ダ・ヌメア

などというふうである。ところが、この小計がすこぶるあやしい。まず [A] の第一項の一人のゲメ18シラがおかしい。というのは、次

の21人のゲメの受給量が一人当たり18シラを下ることがありえないので、24シラないしそれ以上でなければならない。また、21ゲメと

あるが、実数は20人である。次に〔B〕では、23 game₂ とあるが、実数は 17 game₂ である。これは、マイナス記号が消えていたに違いない。ごく一例をとってもこういう状態である。

筆者は、かゝる例証を、シュメール経済文書の手写史料による検討の非科学性の例としてとりあげているのではもちろんない。むしろ不可避的な史料の不正確さを、同種の文書を比較対照することによって、かなりの程度まで補正で

きることを主張したいのである。きくところによれば、ヨーロッパ中世の修道院などの経済文書にも、こうした不正確さが付随するというが、ラガシュ文書には、多数の \check{se} -ba 表のごとき比較検討のできる記録があるということ強調したい。

(註)

「シュメール都市国家ラガシュにおける神殿の社会組織について—— 割当地保有者をめぐって」(「史林」41巻6号)

バブ教とバハイ教

高 林 藤 樹

バブ教およびバハイ教について、我が国ではあまりよく知られていない。それは、今日ではすでに100年に余る歴史を有し、教徒もほとんど全世界にわたって存在して居り、世界教の名を冠してはゞがらない程の勢力を擁している。日本への到来は割合早く、大正年間にはすでに各地で布教が試みられていたが、戦時中はその世界主義的な主張が誤解されて弾圧を受けた為、未だ教徒も少なく、一般にもあまり知られていない。発祥地がイランであることは、西南アジア研究会にとっても縁浅しとしないとことから、以下簡単ながら紹介を試みる次第であるが、もとより研究も充分でなく、不明の点も多い。読者諸氏の御教示を切にお願いする次第である。

(1) 名称について

両者共、教祖の名をとったものである。バブ Bab とはアラビア語で「門」を意味し、イスラムにおいて、人々がそれを通して真理に到達することが出来るとされているもので、元来精神的な指導者を指すものであったが、バブ教が有名になってからは、教祖ミールザー・アリー・ムハンマドの別名として専ら用いられるようになった。

バハイ教は、教祖ミールザー・ホセイーン・アリー・ヌーリーの別名をバハー・ウッラーと言ったので、その名をとったものである。バハーはアラビア語で「栄光」の意である。ところで「イ」はベルシャ語で人々の集団を表す接尾辞であるから、バハーイーは「バハー教の人々」の意味である。従って邦訳も「バハー教」の方が適当かも知れないが、教徒の間では「バハイ